医事・文談　九百八十三

《正岡子規（36）の続き》その271
子規周辺の人びと（二十一）

平岸　三八

子規が喀血したのが明治22年5月9日、10日には山崎医師の診を受け、肺が悪いと言われた。漱石は13日に友人らと見舞い、更に長文の書簡を書いて入院治療の必要を説いたが、子規はこれに従わなかった。経済的理由もあったであろう。しかし、病の重大さには充分気ずき、「泣いて血を吐くほととぎす」にちなんで子規と号し、時鳥の句四、五十を作り、余生はほぼ十年と予想した。これは殆ど適中した。

漱石のこの書簡の末尾には「小にしては御母堂のため大にしては国家のため自愛せられん事こそ望ましく存候」とある。この時ふたりは共に数え23歳である。この若年にして既に友人を見抜いていることは大したものだ。

この明治22年夏、漱石は房総地方（千葉県）を旅行して、その紀行文を「木屑録」と名付けた。全文漢文で記してあって、文中漢詩が挿入されている。

子規は「木屑録」を借りて読んで、それぞれの部分についての批評はその上部にしるし、おしまいに総評を書いて漱石に返却した。子規の評も漢文でしるされた。

その評の部分の漢文を、高島俊男著『漱石の夏やすみ　房総紀行「木屑録」』（朔北社　二〇〇一年三月五日発行）から引用することとする。

――きみの英語がよくできるのはまえから知っていた。きみの漢文を見たのはこの木屑録がはじめてだ。ぼくときみとは学校にはいってともにピーチクパーチクをならい横文字をかいた。きみは断然頭角をあらわし、洋語をしゃべること国語のごとくであった。ぼくは西につよいものは東によわい、きみも当然和漢の学はだめだろうとおもっていた。この詩文を見てきみの天与の才を知った。詩文の能力は才のはたらきである。文学の自他、学問の東西にはかかわらない。きみのごときは千万年に一人である――

漱石は子規の対し、「国家の為め」入院加療せよと書き、子規は漱石の詩文に対し「如吾兄者千萬年一人焉耳」と賞揚しているのである。

子規は短い一生に、俳句、短歌の革新を成し遂げ、写生文を提唱して、ほぼ今日の日本文の基礎を築き、漱石は国民作家の一人として、文豪の名をほしいままにしている。単なる仲間ぼめや内輪ぼめでないことは、その後の二人の仕事がハッキリ示している。ただ漱石はもっと早い江戸時代に生れその漢詩文の才を発揮したならば、小説家としての名声よりは、遥に高名な漢詩文の大家としての名をほしいままにしたかもしれない。少し後れて生まれてきたようだ。

子規が診察を迄うた山崎元修医師について、少々面白い資料をみつけたので紹介したい。

小生は若い時から古書店をめぐり歩くことを趣味とし、気に入った古書を買ってはむさぼり読んだ。今は超高齢になったので、全国いろいろな古書店から送られてくる目録を楽むだけであるが。

つい先日、東京神田の有名な古書店泰川堂から総合目録（平成18年度9月号）が送られてきた。

古書目録は購入するしないに拘らず、見るだけでも楽しく、いろいろの知見を得ることができる。

今回もこの目録の医学関係の部を一見して、いろいろ得るところがあった。医学関係の部だけでも上下二段にビッチリ12頁にも及んでいるのだ。その末尾に次の本が記載されているのを発見した。

袖珍海浴示導　南江堂蔵梓　山崎元修校補　三潴謙三編纂　明28

明治28年に、現在もある医書出版書店南江堂から、書名から推すと海水浴の指導書らしい袖珍本が出版されていて、編纂者は同級生の三潴謙三（鉄門倶楽部氏名録に山崎と同期卒業）で、山崎が校訂補筆して出版されているのである。

本の内容も調べずに、海水浴と断定するのもいかがかと思わぬではないが、書名から推して、それらしく思われる。

以下に、少々主題から脱線して、海水浴について記述する。